

自然と神と縄文人

鹿熊 勤 自然系ジャーナリスト／立教大学兼任講師*

Nature, God and Jomon People

KAKUMA Tsutomu

縄文時代に関心が高まっている。2018年、全国から出土した土器・土偶など200余点を展示した東京国立博物館の『縄文 1万年の美の鼓動』展には、2か月間の会期中に35万人もの入場者があった。内訳までは調べられていないが、筆者が観覧した日は若いカップル、女性グループ、親子連れが多いという印象を受けた。これまでも縄文ブームとも呼べる社会現象は何度かあったし、縄文の常設展示施設は全国各地にあるが、そういう館で出会うのは、たいていは学習のため訪れた学童団体か、いかにも考古学好きな年配の男性、あるいは旅のついでに寄ったと思われる熟年カップルである。知の中心地である東京国立博物館主催とはいえ、考古学をテーマにした一企画展に35万人の人が訪れたという事実には、正直驚かされたし大きな話題にもなった（誉田 2018）。

ここで振り返っておきたいのは、この縄文展のテーマが「美の鼓動」であった点だ。入場者の関心は、考古学の成果を真摯に学びに行くというよりも未知なるものへの素朴な好奇心、あるいはアートの要素にひかれてのことであろう。展示自体も、1年以上続いた縄文時代のトピックスを教科書的に時系列化したものではなく、土器や土偶、生活遺物に見られる芸術性

に絞られている。考古学への誘いというより、近年盛況が続く美術展の新たな領域開拓とも読めるし、アニメなどの“キャラ”にも通じる土偶の不思議で強烈な存在感を通じ「かわいい」「おもしろい」とコンタクトしてくる人たちをターゲットにしたものかもしれない。

同様のムーブメントに、アニメやゲームから急速に火のついた刀剣人気がある。若い女性が日本刀や戦国武将の魅力を熱く語る時代が来ようとは、当の美術刀剣の関係者すら考えたことがなかったという。縄文もどうやらそうしたキャラクター・カルチャーの仲間入りを果たしたようである。このような盛り上がりや集客手法を、苦虫をかみ潰したように見ている正統派の研究者・ファンもいるかもしれないが、学問への入り口と領域の裾野を広げたという点では非難されるものではないし、そもそもその功績は特定の博物館の学芸員だけのものではない。全国各地で地道な発掘調査や分析を行ってきた多くの研究者の努力の蓄積があって、はじめてかなった一般化と考えるべきである。

考古学は土の下に眠る人類の過去を調べる学問だけに、そうそう未知の事実が発見されることはないが、今、縄文時代に幾度目かのライトが当たっているのは、ホームランでこそないものの、クリーンヒットのような研究成果が次々

* pfc00164@nifty.com
情報工房「緑蔭風車」

に報告されていることとも無縁ではない。たとえば1950年代から60年代にかけて、縄文人はすでに農耕（穀類栽培）を行っていたという論が中部高地（甲信地域）をフィールドとする藤森栄一らから提起されていた。鋤の機能を持つ薄く幅広の打製石器が多出するというのが論拠のひとつであったが、物証となる炭化穀類、それも種レベルを明確に特定できる史料が極めて少ないなどの課題があった。藤森が種子の貯蔵容器と主張した有孔鏝付土器の存在も、傍証としてはありうるが確証ではないとして、縄文農耕論は停滞。その後尻すぼみになった。

ところが、2000年代に入り大きな展開が起こる。縄文土器の表面や破断面に残された小穴の存在が気になった研究者が、シリコン樹脂を注入してみたのだ。シリコンレプリカ法と呼ばれる手法で、直近の90年代に日本人考古学者によって発表された、当時最新の復元技術であった。弾力のある状態で固まったまま抜き取られたシリコンを顕微鏡で調べてみると、その小穴のひとつが、まさに栽培大豆の形と大きさを示していたのである。そこからシリコン樹脂を使い土器を再精査する研究が各地で始まった（小畑2016）。

そもそも土器に小穴ができるのは、焼成前、つまり柔らかな粘土のときに有機物が混入したためである。有機物は800度ほどの温度にさらされたことで土器の中で灰になってしまっているが、それによって生じた空隙は有機物の原型そのものだ。シリコンで型どりをしていくとあちこちで豆の痕跡が見つかった。そのうち、古い時代のものは栽培豆でなく野生種のツルマメ（大豆の原種）、ヤブツルアズキ（小豆の原種）であることが明らかになった。どちらも現生の栽培品種の原種とされる東アジアの自生種である。さらに重大な発見は、縄文中期から後期・晩期に向かうにつれ、それらの豆の粒が大型化に向かっていることだ。つまり人の手による農

耕的管理が行われていることが示唆された。このシリコンレプリカ法では、豆やクリ、イネ科種子などの澱粉質を食い荒らすコクゾウムシの遺骸も多数見つかった。土器の中にこうしたものが混入するということは、クリや豆、あるいはイネ科穀類が土器製作場付近に集約的に保管され、縄文人の食の中で一定の比重を担っていたということでもある。農耕をどう定義するかというそもそもの議論はあるものの、野生の植物を管理下に置き、特定の遺伝形質を持つ種子を選択して後世に受け継いでいく栽培と品種改良が日本列島でも行われていたことが明確になった。また、日本の栽培大豆のうちのいくつかは縄文時代の野生種に由来する可能性も示唆された。

炭素、窒素の同位体分析装置やカメラ、顕微鏡など装置の革新に伴う新たな発見もある。たとえば同位体分析は、縄文人の人骨や土器に付着した澱粉質、油脂、たんぱく質の焦げ跡から、その個人や土器の利用者が食べていた食料の種類構成までわかるようになった。花粉化石や植物遺骸の細胞分析技術では、科・属レベルの同定より一歩進み、種自体まで明確に特定できるようになったことで、縄文集落を取り巻く植物相の構成やボリュームのような全体像が読み通せるようになった。クリは集落内や縁辺でかなりの密度で存在していたことから、現在の果樹園芸と同じような栽培が用材調達（林業）を兼ねる形で行われていたことが浮かび上がってきた。クリにおいても野生豆類と同じく実の大型化が起こっている。樹液が塗料や接着剤として利用できるウルシも高密度で植栽されていることから、いわゆる里山の歴史が縄文にさかのぼることもわかりはじめた。

このような新技術の模索だけでなく、研究手法の反省を踏まえた洗い直しも進んでいる。たとえば貝塚や住居跡の炉の土だ。かつての考古学は肉眼で識別可能なものを中心に出土物を調

べていたため、ふるいの目からこぼれおちるものは研究の残渣として扱われ、関心の眼が向けられてこなかった。ところが、ふるいの目合いをうんと小さくし、そうした土や灰を文字通りふるい直してみると、これまで見落としていた事実が存在することがわかった。小魚の骨や鱗、歯である。このような細かい出土物の数量は合わせてみると非常に多く、従来考えられていた漁撈で得られる食の構成比を変えるほどだという。もうひとつの象徴的な例が東日本におけるサケの利用だ。サケは大型の魚で毎年秋になると川を通じて内陸深くまで入り込む。母川回帰する性質もあるため、安定的かつ優れた食料資源であった。アイヌの例を見ても、縄文時代には各流域で相当に利用されたと考えられてきたが、サケは加工部が多く、しかも骨が軟らかいため少ない残渣はすぐにバクテリアに分解されてしまう。大きな割にどの程度利用されてきたかという量的なデータが得られにくい魚がサケであった。ところが炉辺の土灰をふるい直してみると、かなりの頻度でサケの歯が混入していることがわかってきた。

竪穴住居といえば縄文時代の象徴で、多くの博物施設の再現住居は茅ぶきで建てられているが、その常識も変わり始めている。縦穴住居の主流は茅ぶきではなく、木の皮や粗朶（枝）で造った寄せ棟の骨組みに土を厚くかぶせた土ぶきだったのではないかというものだ。茅ぶきによる再現は、考古学がまだ黎明期だった戦前、建築学者の意見を取り入れる形で作り上げたひとつの想像モデルにすぎず、植物体としての茅（カヤ＝ススキ）がそれほどまとまった形では出土していたわけでもなかった。その想像モデルが歳月を重ねるうちに独り歩きし既成事実化してしまったのだという。その後、樹皮や粗朶で構成した壁面に斜めにのせたとされる土が、レンガ状に焼け固まった燃失住居が発掘されたことから家屋構造の再検討が始まった。土ぶきの住

居は各地で次々に見つかり、竪穴住居の再現に際しても近年は土を乗せるケースが増えてきている。

このように、エキサイティングな発見も多い縄文研究だが、いまだによくわかっていない領域がある。それが土器の文様や土偶の形式に込められたそもそもの意味だ。土器や土偶の表現には時代性や地域性があり、出土層位が明確であることから、編年や文化圏・交流圏の指標となってきた。土器の文様や土偶の形態は長く考古学研究の基盤になってきたにも関わらず、特徴的な意匠に込められているその意味は、今もってはっきりとは解き明かされていない。本稿の試みは、その謎から人間のスピリチュアリティ（霊性）を考察してみようというものだが、話題に踏み込む前に、もう一度縄文という時代について簡単に整理をしておきたい。

自然資源にのみ依存した生き方でありながら、縄文時代がそれ以前の旧石器時代と大きく異なるのは、定住生活を始めたことである。契機は1万5000年ほど前に起きた急激な地球温暖化（氷河期の終焉）で、植生をはじめとする生物相が劇的に変化した。この気候変動により、現在の日本列島は草原の大型動物（ナウマンゾウ、オオツノジカなど）を対象としたリスクな狩猟生活から、クリなど澱粉質を豊富に含む広葉樹の堅果を中心に、それら広葉樹の森に適応したイノシシ・シカなどの中型動物、海進によって内陸部まで広がった浅海域の豊富な魚介類を組み合わせた、安定性のある狩猟採集生活への移行が実現したと考えられている。それに伴い、クリなどは前述のように栽培がなされ、選択的な品種改良も行われた。遊動型のテント生活から竪穴住居での定住に変わったことで調理方法にも変化が現われる。土器の多用である。土器は現代でいう鍋であり、骨までスープ化できることから栄養摂取効率がきわめて高い（岡村 2018）。

縄文時代はおよそ1万年続いたが、規模の大きな拠点集落では千年規模にわたり同所での生活が維持されたところもある。それほど長く続いたのは、日々の暮らしが十分に満ち足りたものであったからだろうと想像できるが、この持続性を物質的な豊かさだけで説明することは難しい。なぜなら、私たちが生きる21世紀は歴史上、最も物質的幸福を享受している時代だが、その割に幸福を実感している人は少なく、むしろ社会は不安の種だらけである。この物質的幸福は自然資源の浪費と環境破壊により成り立ち、持続性がないことに誰もが薄々気づいている。経済発展と幸福実感には正の連動性がないことを知ってしまったことが不安を増幅している。つまり物の充足が精神の充足を図ってくれるとは限らないのである。そして大事なのは、満足と不満の感受性には個人差があり、その違いはそれぞれの人の教養や理性、哲学などに基づくものだからである。

縄文時代の暮らしに不満がなかったとは思えないが、ほぼ同じ生活形態と文化性が保たれたまま1万年以上続いた（縄文時代と元号で表記される今の時代とは歴史区分としての整合性がとれないためここではこのように表現する）。つまり安定していた。その安定は、気候変動を利用してほどほどに食料が安定される仕組みを作り出した技術の功績が大きそうだが、縄文の持続性を読み解くうえで欠かすことができないもうひとつのキーワードが「精神性」であろう。不満を不満に、不安を不安に思わないための心の持ちようといえればわかりやすいだろうか。その精神性の象徴と考えることができるのが、表面の縄目文様と、ときに芸術とってよいほどの造形が加えられた土器である。人型をした土偶にも縄文人の何らかの思いが込められているはずだが、残念ながらそれらのメッセージは現代人のわれわれには正しく解読できそうもない。しかし、想像

することは許される。文様や造形に込められているのは明らかに当時の人たちの何らかの心の思いであり、端的に言えば文字に変わる絵解きの物語なのかもしれない。

縄文人は祭祀のようなイベントを盛んに行っていたこともわかっている。一般にごみ捨て場と位置づけられる貝塚も、捨て場というよりは生命の宿ったあらゆるものに感謝し再生を祈る、送りの場という解釈のほうが適切だという人も多い。アイヌの熊送りの儀式や神話、さらに北米先住民などの口承や儀礼にも、大自然への畏怖と幸をもたらしてくれることへの感謝、原資である自然の持続性を損なう考えや利己的な行動を戒めるような考え方が見られる（濁川 2017）。縄文人も同様の心根を持っていたと考えた方が自然であろう。

長野県諏訪大社の勇壮な御柱祭や、射止めたシカ・イノシシの頭部を奉納する御頭祭といった神事のルーツをたどると、そこには縄文人が信仰した在地の古い神（国津神）と、新たに地上を統治した天津神との交代劇の残像も見ることができる。縄文人は貧しく、重労働に耐え、気まぐれな自然の幸を採取することに日々汲々としていたように思われることもあるが、その実労働時間は1日4時間ほどでよかったという。ちなみに人間の労働時間は、狩猟採集社会のときより農耕社会になってからの方が長く、しかも過酷になっているといわれる（スーズマン 2019など）。縄文土器に繰り広げられた豊かな表現も、しばしば行われていた祭祀も、そうした「ゆとり」を抜きに考えられない。また、子供の頃にポリオに罹患した成人女性の骨や、折れた大腿骨が治癒していた壮年男性、歯がすっかり抜け落ちた高齢者の頭骨などの出土例は、福祉やワークシェアリングのようなセーフティーネットがすでに存在したことを窺わせる。今日のさまざまな社会的課題について考えるときも縄文人の生き方は示唆に富んでいるが、

本稿では彼らのスピリチュアリティに絞って検討していくこととする。

縄文時代の「縄文」とは、土器表面に残された文様に由来する。縄文土器の中には平滑な無文のものもあるが、多くは器体表面に植物の繊維をより合わせて作った縄を転がした痕が残っている。すなわち縄文である。この縄の用途は一義的には粘土を転圧することで表面の凹凸を均し、粘土の密度を高め器体を丈夫にするローラーと考えられているが、その過程で土器表面に縄の形状が鮮やかに転写される。繊維の太さや数、撚りの強弱によって生じる縄目模様はさまざま、転写される文様をあらかじめ意識したようにつくられた縄のローラーもある。斜めに螺旋を描くように転圧するなど規則性があることから、基本デザインと表現されることが多いが、この縄目そのものが縄文人のスピリチュアリティのひとつだという説がある。歴史的・民俗学的考察も加えると、縄目は交尾するヘビを見立てたものだとする説が有力なようだ（吉野 1999, 大島 2014）。縄文人はさまざまな生き物を霊力の宿る存在として尊重してきたが、その代表的な存在が、人間から見れば手も足もない奇怪な生き物であるヘビだ。ヘビは土や茂み、ときに水の中まで滑るように出入りする。冬に姿を消すが、春になると再び忽然と現われる。その交尾姿はまさにあざなえる縄のようであり、交尾自体が数日に及ぶ場合もある熱烈なものだ。噛まれると死に直結することのある有毒のマムシは、卵胎生のヘビであり卵ではなく仔ヘビを直接産む。こうした光景を目にする中で、ヘビを聖なる生き物＝霊性のシンボルに据えたというものである。

縄目文様そのものが蛇であると言われてもにわかには信じられないが、地域・時代によっては器体の装飾として直接的に、より具体的表象としてヘビが描かれている。中部高地では、マ

ムシとはっきりわかる三角形の頭と銭型紋が強調された土器が多数出土している。表現に濃淡の差こそあれ、ヘビは縄文人にとってトーテム（精霊）的存在であったことは明らかなようである。独特の儀式が多いことから縄文の信仰との関連性がかねがね指摘されている諏訪大社には、蛙狩神事という特別な行事がある。寒中にカエルを弓で射る儀式で、近年は動物愛護の観点から異を唱える人も多く、非公開の儀式になっている。この行事の意味するところは神への奉納である。カエルを供物にして喜ぶ神といえばヘビにほかならない。甲賀三郎伝説に代表されるように、諏訪は太古からさまざまな蛇籠伝説のあるところで、諏訪大社の御室神事に登場するミシヤグジという神も蛇体である。諏訪大社の神長官として70代以上にわたって影響力を持ち、御頭祭を主宰してきた守矢氏の守り神もまた蛇だ。御柱を曳く太い縄の端は、とぐろを巻いたヘビの形にまとめられる。

再生のシンボルと考えられている土器の意匠として代表的な生き物には、ほかにイノシシ、カエルがある。どちらも多産であり、諏訪大社の蛙狩神事がそうであるように、カエルについてはヘビとの関連性を想起させる。しかし、土器上に表現されているカエルは、むしろ天上で満ち欠けを繰り返す月に対峙させたものであるという。長野県富士見町の井戸尻考古館は、カエルや半人半蛙文と呼ばれるキマイラ様のキャラクターが描かれた土器を多数収蔵、それらが土器図像の中核をなしていることで知られる。器体のプロポーションは女性像を連想させるもので、くびれがあったり、土器によっては女性器が表現されている。これらの意味するところを、考古館では次のように読み解いて公式見解としている。少し長いが引用する。

「蛙、とりわけヒキガエルは光らない暗月、しかし、これからよみがえる月の不死

性を表敬する生物だった。永遠に止むことのない月の満ち欠けは、眼前にあって万物の消滅と生成の法則を圧縮してみせてくれる。月こそ死と再誕生の本源だとみられた。月の満ち欠けと潮汐、月の暈と雨、月夜と梅雨など、月と水との関係は現実のものである。ヒキガエルは、月面の凹凸と同じいぼいぼを身に負っている。女性の月経は月と不思議な暗号で通ずるいっぽう、誕生した赤んぼうの肢体のさまは、蛙のそれによく似ている。こうして、水と蛙と女性は月という共通項のもとに、おのずと組織される。月には不死の水があるとされ、女性の生殖力が月の再生力に比せられ、死者もまた世代を超えて月のようによみがえると信じられたのである」(井戸尻考古館 2019)

カエルや半人半蛙との関係性のほか、月とヘビをかたどった土器もある。この場合のヘビは新月を象徴したものであると解釈されている。いずれにしても消滅から誕生、成長のサイクルを示したもので、死という宿命を知りつつも、時が満つれば再びよみがえるという再生・不死の願望を、月の周期、カエルやヘビが収縮膨張する姿、そして生命を生み出す女性によって意識下に表現したと見てとることができる。このような太陰観に基づく説話は世界中で類例を見ることができ、同様にヘビやカエルが登場するストーリーもある。これらは偶然の産物というより、アフリカで誕生した現生人類が、7万年ほど前に大移動を始めたときから意識の中に携えられていた古層的な世界観であり、人々が根を下ろした地域で伝承が繰り返されるうちにローカルな物語として独立していったものと考えられないか。

近年の脳科学の説によれば、人間の思考のメカニズムは必ずしも合理的判断や力の論理によって統御されているわけではないようだ。相手の気

持ちを押し量る社会性動物としての協調性が本能的にあり、協調を尊重するがゆえに、ときには非合理的な論理を優先的に構築しようとする思考基盤があるという(プレマック 2005)。つまり、もっともらしい説話=神話の創出である。誰もが直面したときに暗澹とした気持ちになる際たる現象は、大事な家族や親しい仲間、そして自分自身の死である。実際の死は苦しく無残で汚いものである。意識を失い、生命としての終わりが過ぎると、待っているのは分解と無機化=物質化である。遺体はガスで膨満し、どす黒く変色し、腐臭を漂わせ、虫や動物に食われる。最後は灰色の骸となる。その無残な現実を単純に肯定しないための認知の方法が、天体や季節の規則性を暗喩に用いた再生論理であり、象徴を誇張して表現するレトリック(修辞)だったのではないかという(大島 2014)。

自然を神という存在に置き換えると同時に、命は生まれ変わるものであるという共通認識を装置的に戴くことによって、原初の間人社会はひとまずの安寧を得ることに成功したのかもしれない。このような不合理なストーリーをここでは原生神話としておくが、神話が意識装置としてうまく機能している間、合理性は必ずしも優先されない。なぜなら、死後の再生が概念上ではあるが約束されているからだ。科学の時代である現代においても宗教に帰依する人々が多いのは、人間の中の非合理的な選択が科学的合理性と相反しないためである。大島の論を借りれば、一見矛盾に見える選択を同時に行えるしたたかさこそ、高い知性を獲得した人間の特質であるのだ。

縄文的な不合理の象徴といえば、新潟県信濃川流域を中心に東日本で見られる火焰型土器がある。器体上部の大きな把手を中心に炎のようなダイナミックな波形、または渦を表現したもので、造形的にも突出して高度であり、芸術性の高い出土品である。しかし、調理器具として見た場合、とても使い勝手がよさそうには感じら

れないバランスだ。外形からいかにも祭祀のために作られた土器という印象を受けるが、意外なことにこの火焰型土器、日常の煮炊きに使われていたという。なぜなら、ほぼすべてといってよいほど火にかけて使用した痕跡があり、中には食材が焦げついたものもある。何より、一般的な捨て場から他の生活ごみに混じって普通に出土する。祭祀限定の器だったならば出土する場所も限られるはずである。誰もが作れたとは思えないセンスで、製作に費やされた時間も膨大。また、装飾の意匠は好き勝手に決めてよいものではなく、統一がとられていた。その造形的約束事こそ、一族が受け継いできた天空の規則性をはじめとする森羅万象と命の関係性の物語にはかならない。そこには、住居の建て方や農耕的な食糧調達技術といった効率性と対をなす、悠然ともいえる非合理的な選択思想が見てとれる。

従来、縄文土器の装飾は芸術やデザイン、哲学といった切り口で解釈されてきた。冒頭に紹介した縄文展も、美意識は縄文時代に存在したという前提になっている。しかし、これら表象の背後にあったものをひとつひとつ想像していくと、美意識という視点は現代に生きる私たちが信奉する写実絵画や幾何学をモノサシにしたものでしかないようにも思えてくる。多分に対比的であり、縄文時代の表現者が、同じ公式に沿って個性を示しそうとしていたのかどうかはわからない。おそらく、縄文の造形には芸術や美術といった意識はなく、人生とは何かという哲学的自問もおそらくなかった。表現されたものは美意識ではなく、ただ崇高でありたいという情念だったという見方もある（大島 2016）。そこを感じ取ったのだろうか、岡本太郎も縄文土器や土偶の表現を美意識ではなく世界観と呼んだ（大島 同）。彼の頭の中を爆発させたものは、縄文人の美意識ではなくあの世の見方だったのかもしれない。崇高なる情念とは、ただた

だ暮らしが平穏であるようにということと、死者に必ず帰って来てほしいという願いだ。シンプルだが、シンプルであればこそその力強さが縄文の造形にはあり、スピリチュアリティに鈍感な筆者のような現代人にもじわじわと響いてくるのである。

縄文土器に表現されたトーテムを見るうえでもうひとつ重要なポイントは、物語の舞台が夜であることである。闇は人々の不安を掻き立て、安全な竪穴住居も火を焚かなければ暗い。

ちなみに、月と対をなす存在である太陽の神話は、人々が農耕・牧畜という生活を選択した結果、人口の拡大（社会の膨張）、富の偏在化（不平等）、権力（暴力）が構造化した時代から多出するようになる。ギリシャ神話では多くの神がすでに人の王族の姿をしており、覇権を巡り抗争を繰り返すストーリーになっている。全知全能の神とされるゼウスは宇宙に君臨する破壊的力を持つ絶対権力者として描かれている。息子はアポロンであるが、そのストーリーは時を経て太陽神ヘリオスと合体されていく。支配者＝王は太陽を自在に統御できる立場でなければならなかったのかもしれない。日本の記紀神話も同様の構造である（その中には縄文につながる古層の神話を併呑してきた痕跡も多々見える）。

筆は再び土器に戻る。土器上に表現された意匠は、縄文の人々が一族ごとに戴いてきた神話そのものであると考えると、その存在を理解しやすい（夢枕 2018）。このような生命再生の物語を静かに語り継ぐ場としてふさわしいの是一家団欒の席である。その意味でも、中心的調理具である土器にストーリーが仮託されていることは重要だ。たとえば、こんな光景を浮かべてみる。食事が済んだところで、祖父母が時間を持って余した孫たちと土器の置かれた炉をはさん

で向かい合わせに座る。祖父母のうちのどちらかが静かに口を開き始めると、子供たちはその不思議な物語をもっとよく聞こうと前のめりになっていく。それは柳田國男が「面白い」という言葉の語源だと言った、年寄りの話に夢中になった子供たちの顔が薪の火によって白く照らされていく炉辺夜話の光景と同じだったのではないか。文字というものを知らなかったからこそ、家の中心である炉に据えられた土器に描かれた表象は大きな意味を持ったし、語りを補佐するテキストとして機能したのではないか。当然、肅々とした、そして謎めいた気配も伴っていないければ重みがなかっただろう。その対話のひとつときは、やはり暗い夜でなければならなかっただろう。土器の装飾がこうした絵解きの教材であったのなら、その発想は弘法大師が仏教の本質を字の読めない庶民に説明するために描いた曼荼羅と同じらしい（夢枕 同）。

人間にとって最大の不合理であり、時に不条理である「死」を納得するための装置が土器の文様や造形であり、その申し送りの伝わった範囲と時間が縄文時代だったとすれば、縄文の人々は生きるうえでの不安を完全に克服していた人生の達観者といえるかもしれない。縄文文化は、変動によって新たに生じた気候や自然資源の量、人口密度、社会制度のバランスのよさに加え、人間の思考性を司るもうひとつの思想「非合理性」によって創出されたスピリチュアリティによってはじめて確立し、1万年も維持されてきたのではないだろうか。

縄文とはどのような時代だったかと問われれば「心」が最も尊重された時代だったといえるかもしれない。それこそが持続性を担保する最大の原資だったのではないか。その傍証が、縄文時代を代表するもうひとつの表象、土偶である。土偶は人型にした粘土を焼成したフィギュアだ。タブレット形式のものもあれば立体像

もあり、大きさもさまざまで、生活上の実用性はない。用途の位置づけは神像で、現代の製品になぞらえて近いのは神社のお守りである（岡村 2018）。女性をイメージしているとされ、極端に簡略化されたもの以外はほとんどに女性的なしるしを見ることができる。部分だけのタブレット型土偶の場合も乳房が表現されるなど女性性を強調している。

土偶の様式も編年や地域色、あるいは文化圏・交流圏を知る大きな手掛かりになってきたが、そもそも土偶が神像であったとしても、それはなんのために作られたのか。土器の表象とはどのように異なり、また同じであるのか。その姿かたちに入められた祈りのメッセージは具体的にはどのようなものであったのか。これらは結論から言えばすべては謎であり、答えがない。議論も百家争鳴のごとくあちこちで続いているが、深いレベルでの共通の見解を得るには至っていない。造形の変遷も見られるが、その背景もまた不明としかいいようがないようだ。遮光器土偶のように、印象に予断を残す過去の命名によって見る側の思考が停止し、議論が進まなくなってしまった土偶もある。青森県の風張1遺跡から出土した国宝土偶も同様である。その姿から「合掌土偶」と命名されているが、敬虔な祈りの様子を造形したものではなく、出産の光景をリアルに描写したのではという見方もある（岡村 同）。しっかり合わさった手は祈りのポーズではなく、紐を握り腹に力を入れている座産の様子だという見方である。このような見立ては物証主義を第一とする考古学が最も用心しなければならないことだが、過去には安易に見立てられたものも多い。このような命名（愛称）レベルからも洗い直しが必要と思われる。ここへ果敢に踏み込まないことには土偶は真の学問対象にはならない。

土偶とは一体なんであったのか。それをひもとはく最初のヒントはほぼ例外なく女性像である

ということだろう。時代、地域によっても異なるが、豊かなボディーラインをもったもの、男女の交合や妊娠・出産を連想させる姿、女性器がむき出しになったものなど、生殖に関わる状況を示した土偶が少なくない。女性がいなければ社会は維持できないが、女性には男性にはない出産という大きな潜在リスクがある。現代においても出産は自身にも危険が伴う命がけの大事業である。縄文時代は食に恵まれ豊かだったといっても、生活環境、ことに衛生状態は十分であったと言えない。今の衛生水準に照らせば問題だらけだろう。医療的知識や技術も原始的で、乳幼児死亡率は現在の水準から比べると極めて高かった。そうした不安を安心に転化する行為が祈りで、人々の思いを仮託されたものが土偶だった（岡村 2019）という見立ては最も明快だろう。とはいえ、女性の形に仕上げた焼いた陶片に、いきなりそのような効力が宿ったとは思えない。現代のお守りも同じで、生産工場から送られてきた段階ではただの布きれ、板や厚紙であり、何のありがたみもない。神職による祈りの儀式を恭しく受けたのち、社で授けられるからこそ神性が宿ることになるのである。

この論法にたてば、縄文時代も土偶に霊力を吹き込む神職のような立場の存在が必要だった。シャーマンである（夢枕 2018）。シャーマンは原始社会における司祭だが、呪術師であり医師でもあった。卑弥呼伝承や民族事例などに照らすと、縄文のシャーマンは女性であったと考えた方が自然だ。産科医院で出産することが普通の現代においても、陣痛が始まると家族はどうか元気な赤ちゃんが生まれてきますようにと祈る。祈りというスピリチュアルなパワーを儀式によって統合し、目に見えない神々、あるいは先祖に伝えることで生命の再生を実現させるのがシャーマンの役目である。縄文のシャーマンは、出産に対しては助産婦的な役割も果たしていたかもしれない。女性の命を預かる立場

であるからこそ、土偶もシャーマンも出産における心身の痛みがわかる女性でなければならなかった。それを前提に、以下は土偶の様式の変化について考察してみる。

長野県茅野市の尖石縄文考古館が所蔵する2体の国宝土偶が象徴的だ。1体は縄文のビーナスと名づけられた縄文中期のもので、いかにも安産を連想させる、まるやかな裸体が特徴だ。この土偶が作られた縄文中期中の中部高地は人口が飛躍的に伸びたピーク期であった。発展期の幸福を象徴するように土偶も豊満に表現されている。一方、もう1体の仮面の女王と名づけられた土偶は、女性器や乳房が明確に表現されているものの、幸福感いっぱい縄文のビーナスに対していささか貧相（スレンダー）であり、憂鬱さを象徴するようなシャープな仮面を被っている。つまり土偶自身が女性シャーマンの姿をしているのである。

仮面の女王が作られたのは縄文のビーナスより1000年ほど後の縄文後期前半で、人口減少が顕著になった時代だという。最盛期には10数棟で構成された環状集落が1、2棟にまで減ってしまった時期で、限界集落と化した仮面の女王の集落は、まもなく消滅してしまう。逆三角形の仮面を纏った緊張感ある顔と、憂い・影を背負ったような全体的印象は、当時の深刻かつ切実な集落状況に連動した変化願望の表れではないかという見方がある（夢枕・岡村 2018）。しかも、仮面の女王の右足は故意に折られたような形式があった。災いを払うための代理的なキリング行為と見ることもできる。

このような見立ても推測の域を出ないが、土偶に込められた実際の思いや当時のシャーマン像は、物証とその出土状況だけで読み解くことは難しい。縄文人の精神を発掘することは容易ではないが、それは向き合う人の態度によって変わるのかもしれない。

末筆になったが、筆者はガチガチの現代科学の信者（唯物論や機械論の支持者）であり、今回のテーマを与えられるまでは神も霊もこの世には存在しないと腹の中では考えていた。縄文時代には注目していたが、どちらかといえばその関心は、これまでの常識を覆す先進的な技術や持続性に欠かせない慎重な選択についてであった。しかし、縄文時代の全体像を把握するには、当時の人々の心の内、つまり非科学的と片付けられがちなスピリチュアリティを無視することはできないことに気づいた。この原稿を慌てて仕上げるためのおさらいをする中で出会った概念が、合理性と不合理性という二面性の共存である。霊の存在も生命の再生も信じないといひながら、彼岸やお盆には父親の墓前で手を合わせ、何事かを祈っている。半ば儀式だと思いつつ、気持ちの半分くらいはスピリチュアリティな感覚になっている。がちがちの現代科学信者である筆者も、人は死ねばただの物質…窒素や炭素、カルシウムに帰るだけの存在だとは思いたくない。縄文人の願った再生まではかなわなくても、せめて土壤微生物や植物の栄養素になりたい。物質循環という輪廻に加わりたい。しかし、現代日本の死後には埋葬法というものがあり、もはや食物連鎖の輪にさえ入ってもらえない（樹木葬がせいぜい）。このような哀れな現代人にこそ、スピリチュアルティは必要ではないか。『千の風になって』という歌の歌詞もなんとなく気になってきた還暦の初春である。

重ねて最後に――。

筆者は考古学の専門家でもスピリチュアリ

ティの研究者でもない。自然と人間の関係の探究をライフワークとする一介の著述業者である。当シンポジウムでは時間の関係や自分自身の準備不足もあり、必ずしもタイトル通りの発表とはならなかった。後に論考を原稿として提出するという前提も知らず、ごく大枠でしか論じることができなかったため、本稿に趣旨を整理し直した。引用・援用した情報自体は正しいが、私自身の論理の組み立てや一貫性は十分といえない。にもかかわらず、関係各位には貴重な場を提供していただいた。なお、下記に掲示した文献以外にも多くの論文や紀要を参考にした。先達の功績にも感謝したい。

参考文献

- 菅田亜紀子 平成の終わりに愛を叫ぶ 2018 東洋経済オンライン <https://toyokeizai.net/category/jyomon>
2020年1月6日最終閲覧
- 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編 ここまでわかった！縄文人の植物利用 2014 新泉社
- 岡村道雄 縄文の漆 2009 同成社
- 鈴木三男 クリの木と縄文人 2016 同成社
- 小畑弘己 タネをまく縄文人 2016 吉川弘文館
- 濁川孝志 星野道夫の神話 2017 コスモス・ライブラリー
- 夢枕獏・岡村道雄 2018 縄文探検隊の記録 集英社
インターナショナル
- 富士見町井戸尻考古館 2019 井戸尻第9集
- 後藤明 世界神話学入門 2017 講談社
- 大島直行 月と蛇と縄文人 2014 寿郎社
- 吉野裕子 蛇 1999 講談社学術文庫
- 大島直行 縄文人の世界観 2016 国書刊行会
- Dブレマック、Aブレマック 2005 心の発生と進化
チンパンジー、赤ちゃん、ヒト 新曜社
- 夢枕獏・岡村道雄 2019 すわっチャオ オープン記念
トークライブ 出張！縄文探検隊「中部高地の縄文の神々」録音